



白鳥城址平面図



白鳥城址の石碑



富山稲荷神社



富山稲荷神社創建当時絵図



白鳥神社



古宮に建つ石碑(元白鳥神社跡地)



大峪城址・五福小学校内

注意事項

- ①受付場所の富山観光ホテルから白鳥城址・西出丸広場へバスで移動します。
- ②西出丸広場から白鳥城址・本丸跡までに120段ほどの上り階段があります。
- ③白鳥城址・本丸跡で開会式を行います。
- ④白鳥城址・本丸跡から200段下り階段があります。
- ⑤富山稲荷神社までは長い下り坂があります。
- ⑥トイレは4か所を用意していますが一か所あたりでは男子、女子トイレの数が少ないので注意してください。
- ⑦ゴールの五福小学校から富山観光ホテルまでバスで移動します。

呉羽丘陵を南北縦走

「旧北陸街道を歩く」実行委員会

第4回歴史探訪・平成23年10月22日(土)

日程とコースタイム

- | | |
|---------------------------------|--------|
| 1. 受付(富山観光ホテル) | 8:45まで |
| 2. バス移動
(富山観光ホテル～白鳥城址、西出丸広場) | 9:15まで |
| 3. 西出丸広場、本丸跡へ徒歩移動 | 9:30まで |
| 4. 班編成 | |
| 5. 開会式(白鳥城址、本丸跡) | 9:45から |



(説明個所と時間帯)

- | | |
|------------------|---------------|
| ①白鳥城址(戦国時代の呉羽丘陵) | (10:00～10:30) |
| ②富山稲荷神社 | (10:45～11:15) |
| ③射撃場跡地 | (11:00～11:30) |
| ④白鳥神社 | (11:15～11:45) |
| ⑤大峪城址(五福小学校) | (11:45～12:15) |

- | | |
|------------------------|-------------|
| 6. バス移動(五福小学校～富山観光ホテル) | 12:00～12:45 |
| 7. ホテル到着(第1班) | 12:15～ |
| 8. 本部解散 | 14:00 |

(私の番号) 第 班 番

呉羽丘陵(南側)見どころ表

No	名称	場所	見どころ解説
	呉羽丘陵		富山県の中央部で富山平野を2分するように南西から北東方向に走り、北は百塚で平野部に突入し、南は池多で飛騨山系と繋がっている。約8Kmの長さで、城山(145.3m)、呉羽山(71.3m)、八ヶ山(35.0m)の三つのピークを持つ。 呉羽丘陵を境にして呉西、呉東と云う呼び名が残るように方言や風俗など文化の面で異なる事が指摘されている。丘陵や裾野には数多くの遺跡が分布しており中でも、境野新遺跡(旧石器時代のナイフ形剥片が出土)杉谷古墳群(四隅突出墳、弥生、古墳時代で山陰地域との関連)蛭が森貝塚、小竹貝塚など古くから人が住んでいたことが明らかになっている。 また現存する神社仏閣が多いことから市民の生活との関わりが強く、丘陵全体の大部分が都市計画公園として保全されている。
①	七面堂	峠茶屋	現在の七面堂は、約350年前の万治年間(1658~1660)呉羽丘陵の明神山(稲荷神社付近)一帯に創建されていた七面堂(明治3年合寺令で取壊される)をこの地に移転・再建、しかし昭和19年火災で焼失したため再々建されたものである。お堂には、七面大明神と長久院のご本尊が祀られている。さらに参道の登り口や裏山に当時の石碑や常夜燈が置かれている。
②	旧北陸街道と峠茶屋	峠茶屋	旧北陸街道が呉羽丘陵を越える峠で標高、約50mである。街道は、時代の変遷に伴い、浜街道、山街道などが整備されたが、この旧北陸街道は古代からの道で西から今石動、戸出、中田、水戸田、峠茶屋、そして富山町に入る道であった。 寛永10年(1633)、加賀藩から家立てが許されてから、茶屋が建ち並び今も「アメヤ」「マンジュウヤ」などの屋号が残っている。特に富山藩が誕生してから、七面堂などの神社仏閣の賑わいと共に栄えたところであったが、明治11年、明治天皇の北陸巡幸にあたり、新たに「五福新道」が整備されたため街道としての使命を終え次第にさびれていった。
③	稲荷神社と七面堂	峠茶屋	稲荷神社は、明治初頭に壊された七面堂等の跡地一角に、五穀豊穡などを祈願して建立された。今も、この一帯を明神山と云うように初代富山藩主前田利次公から土地を拝領した富山藩士奥村蔵人が甲州身延山の七面大明神と同形の木像を祀る七面堂を創建した。その後二代藩主前田正甫公が建立した武運山長久院や九代藩主利幹公が建立の妙見堂などが建ち並び、山上には、三重塔が高くそびえ、富山湾から灯火が望遠出来た常夜燈が置かれていた。 当時の賑わいは、今も残っている絵図、絵馬などからうかがう事が出来る。特に建物群は妙法山立像寺に残っている七面宮絵図からみると技術的にも大変高度な七面造であり、また軒唐破風の神門などが描かれていて、往時の隆盛をみる事が出来る。
④	木俣修の歌碑	茶屋町	芝生広場の一角に「木俣修」の歌碑がある。木俣修は、昭和9年から10年間旧制富山高等学校で教鞭をとり多くの師弟を育んだ。木俣修は、若い時から歌人として北原白秋に師事し、後に宮内庁御歌会始の選者を務めるなど歌壇に重きをなした。この歌碑は、昭和58年8月旧制富山高等学校同窓生有志と歌誌「形成」の同人らによって建立された。
⑤	浅田の丘	茶屋町	山頂に「浅田家の墓」がある。
⑥	白鳥城址	吉作	呉羽丘陵の最高峰城山(145.3m)を利用した中世の山城のあとで、今も空堀や井戸跡が残っている。越中平野の東西を見渡せる軍事上の要衝として戦記に多く名が出てくる。なかでも天正13年(1585)8月豊田秀吉が佐々成政を攻めたとき、この城に入った事がよく知られている。このほか源平盛衰記において「今井兼平が寿永2年(1183)御服山に陣を張った」とか、天文元年(1532)、神保長職が上杉との戦いのため築城したことなどが伝えられ慶長4年(1599)頃まで存続していたと云う。 昭和51~57年にかけて富山市教育委員会が城跡の発掘調査を実施し、戦国時代の遺構の下に弥生時代末期・古墳時代初期の土器や住居跡(竪穴遺構)などを発見し県内初の「高地性集落」の存在を確認した。この頃から軍事上重要な役割を果たしていたことがわかる。
⑦	射撃場跡地	金屋・寺町	金屋、寺町から五福いたる一帯(5万4千坪あまり)は、明治40年(1907)陸軍歩兵第69連隊が配置され、その後大正14年(1925)歩兵第35連隊に替ってから昭和20年の終戦を迎えるまでの38年間、兵舎、練兵場、病院など多くの軍事施設が配置されていた。なかでも金屋・寺町に至る1万坪あまりに射撃場があって、周囲に流れ弾を防ぐ土塁や目隠しの土塁が廻らされ、城山の山腹に弾薬庫が置かれていた。現在は、富山大学の学生寮や民間の結婚式場に使われている。また五福地区センターがある一帯に衛戍病院が置かれ、さらに富山大学一帯に兵舎など歩兵連隊の中心施設、野球場に練兵場があった。



No	名称	場所	見どころ解説
⑧	富山稲荷神社	金屋	鎌倉時代(弘長2年、1262年)に伏見稲荷神社から分霊し祀ったとされる。京都東福寺の史料によると城山に稲荷大明神を祭り、山麓に末寺、万松山崇聖寺を建立したとされる。稲荷神社は、室町、戦国時代に入り城山が軍事要塞となり駒見に移転した。その後、神通川の変遷に伴い転々としながらも江戸時代、富山城内に祭られ享保15年(1730)神託により城外へ移転した。またその後、大正2年(1913)内幸町を経て昭和57年(1982)この地に戻る。寺跡地からは、明治の末期に神器、仏器などが出土し国立博物館に保存されている。また創建時代の建物群は、昭和55年、宮司五十嵐精一によって鳥瞰図として描かれ、その絵図が伝わっている。

No	名称	場所	見どころ解説
⑨	白鳥神社と石碑	寺町	当社棟札に表上「日本武尊」、表下「白鳥大明神」、裏「寛保二壬戌歳(1742年)三月九日再興遷宮」と記されている。日本書紀に仲哀天皇が父、日本武尊の御霊が白鳥となって天高く飛び去ったため、父を慕い諸国に白鳥の献上を命じたとある。越の国からは4隻を献上したが、その白鳥捕獲の伝承地が当地とされ白鳥神社の由緒となっている。江戸時代の神社記録には、寺町の白鳥神社は延喜式内社(平安時代に選定・婦負郡では7座)と記され、その可能性が高い。また戦国時代、城山に山城が築かれた時、ふもとの白鳥宮から名前を頂き「白鳥城」と名付けられたとされる。 白鳥神社は、城山の麓に建てられていたが、大正3年(1914年)4月1日、現在地へ遷宮された。元の宮跡は、この地から北へ2kmほどのJR西富山駅の近くで、昭和2年(1927)飛越線が開通した時、大半が線路の一部にかかり、残地に石碑が立っている。石碑には「白鳥明神之趾」、「紀元二千六百年」と記されており、地元では、この地を「古宮」と呼んでいる。

No	名称	場所	見どころ解説
⑩	大峪城址(五福小学校)	大峪城址(五福小学校)	五福小学校が建っている小高い丘が大峪城の本丸跡である。 この城は、天正13年(1585)に豊臣秀吉が富山城の佐々成政を攻めたとき、秀吉が陣地にした白鳥城の山城として安田城とともに築城された。前田利家の家臣、片山伊賀守延高が城を守ったので「伊賀城」とも呼ばれた。文化9年(1812)に測量を行った富山藩士渋谷孝本、安達直章らの記録によれば、城の構造は本丸とその東にある二の丸、これをとりまく総曲輪からなり、南側に流れる井田川から水を取り入れ周囲に堀をめぐらしていたことが分かっている。また「城割」「城ノ下割」「西ノ輪割」などの小字名が城の名残を残し、「大工町」の小字名から周囲に城下町の存在が推定される。 平成元年(1989)富山市の発掘調査で最大幅14m、最深約3.5mの堀あとと本丸へ続く土橋が確認されている。